

現代のイギリスにおけるヒーラーたちのヒーリング

国際ファッション専門職大学
河西瑛里子

要旨

本稿は、イギリス、サマーセット州グラストンベリーにおけるフィールドワークにもとづき、ヒーリングの実践とヒーラーを名乗る人々が多様な代替療法に携わっていくようになる過程について、薬草医や霊媒といった他の代替療法の従事者と比較しながら論じることを目的とする。

初めにイギリスの代替療法を取り巻く状況を記述し、従事者となるための教育制度が整備されていることを示す。続いて、スピリチュアリティの聖地とされるグラストンベリーでは代替療法と関わる機会が豊富にみられる様子を紹介する。さらに、ヒーリングとはどのような実践とみなされているのかを、キリスト教と女神運動のヒーリングを事例として、「エネルギー」という言葉に留意しながら検討する。その後に、ヒーラーを含む4人の代替療法の従事者の事例を提示し、スピリチュアル・スーパーマーケットという言葉を手がかりにしながら、ヒーラーは複数の療法を組み合わせる独自のヒーリング体系を創り出していること、グラストンベリーという土地の特殊性と移住の理由を関連づけていることを明らかにする。

キーワード

代替療法、エネルギー、薬草医学、心霊主義、スピリチュアル・スーパーマーケット

1 はじめに

本稿では、キリスト教と女神運動のヒーリングの実践と、ヒーラーと呼ばれる人々が代替療法¹⁾の1つとしてヒーリングに携わっていくようになる過程について論じることを目的とする。あわせて、ヒーリングの作用機序についても明らかにする。代替療法に対する文化人類学的研究のほとんどは、近代医療に対する伝統医療の使い分けという観点から行われてきた。そのため、おもに非西洋諸国が調査対象となっていて、西洋諸国を対象にした調査はほとんどみられなかった。その少ない研究の1つとして、たとえば鈴木七美は歴史人類学の観点から、19世紀前半のアメリカでは、覇権を握り始めた近代医療制度に対抗して、薬草や水治療などのさまざまな非正統医療運動が起こったことを指摘している[鈴木 2002: 4]。当然、現在の西洋諸国

でも多様な治療実践がみられるはずである。

スピリチュアリティと消費主義についての研究を行っている宗教学者のマリオン・ボウマンが、スピリチュアル市場の重要な商品として注目するのが「ホリスティック・ヒーリング²⁾」である。多種多様な選択肢があり、パッケージ化できるという意味で、ホリスティック・ヒーリングの状況を「スピリチュアル・スーパーマーケット」「つまんで混ぜるスピリチュアリティ (pick and mix spirituality)」と形容し [Bowman 1999: 184]、さらに、「消費者 (=ヒーラー) の選択は、以前は『雑貨店』のような資源から得ていたが、今ではスピリチュアル市場の重要な部分であるヒーリングの『ハイパーマーケット』へと向上した」と述べている [Bowman 1999: 189] (カッコ内の加筆は筆者)。本稿では、彼女の議論を参照点にしながら、考察を進める。

以下ではまず、イギリスの代替療法制度を取り巻く状況を記述する。イギリスでは代替療法の制度と教育機関が整備されており、グラストンベリーでは代替療法と関わる機会がさまざまな形であることを紹介する。つぎに、ヒーリングとはどのような療法なのか検討する。さらに、薬草医と霊媒、2人のヒーラーという合計4人の代替療法従事者の事例を提示し、彼らが代替療法に携わっていくようになる過程とグラストンベリーの関係性を明らかにする。

本稿は2005年と2006年の合計8か月にわたる現地調査にもとづいている。調査方法は、参与観察とインタビューの併用である。代替療法について、書面での回答も含めて公式にインタビューを実施した従事者は11人、キリスト教のヒーリングに携わる聖職者が3人、病院関係者が1人である。その他、20人の代替療法従事者から、会話の形で話を伺った（この中には資格はもたず、たまた無償で知り合いのみに行うという人も含まれる）。インタビューのほとんどは本人の自宅あるいは町内のカフェで実施し、その際、代替療法を施してくれた方もいた。代替療法を参与観察したり、ワークショップに参加したりした機会は26回である。その内訳は、代替療法従事者が集うイベント（3回）、頭蓋仙骨療法（cranio sacral therapy）³⁾の無料体験（1回）、薬草のワークショップ（1回）、ヒーリングについて学び体験するワークショップ（4回）、グラストンベリーの著名なヒーラーとその弟子によるヒーリング（3回）、キリスト教のヒーリング（6回）、心霊主義教会⁴⁾のヒーリング（2回）、後述する女神神殿のヒーリング（6回）である。なお、登場人物の名前はすべて仮名であり、年齢や価格はインタビュー当時のものである。

2 イギリス、およびグラストンベリーの代替療法

まずスチュアート・ローズの議論[Rose 2000: 70-73]を参考に、代替療法の種類をみていく。古くからある代替療法としては、鍼、指圧、中国薬草医学など中国起原の療法、イスラーム文化圏におけるユナニー医学、エジプト由来のアロマセラピー、瞑想法として、ヨーガや太極拳、超越瞑想（Transcendental Meditation, 略称 TM）⁵⁾、ネオシャーマンやネオペイガンの活動がある。西洋圏からの療法としては、ホメオパシー⁶⁾や心理療法、アレクサンダー・テクニーク⁷⁾といった、人間の精神面に影響する療法が挙げられる。いずれにおいても、正統医療のように、精神と身体の二分法を基盤にして、細分化された身体の悪い箇所だけを治療するのではなく、人間を全体的にみて、精神と身体の関係性を認めて、心身のよりよい状態を目指している。

つぎにイギリスにおける代替療法の位置づけの変化を明らかにする。税金で運営され、無料で医師の診察を受けられる、国立健康サービス（National Health Service, 略称 NHS）が設立されたのは、第二次世界大戦後である。当初は近代的な薬の利用が基本で、代替療法は疎外されていた（後述のように、代替療法の資格認定を民間の協会が行っているのは、このためである）[Ernst 2005: 339]。代替療法への関心が高まった背景には、1960年代のサリドマイド事件などの薬の副作用や医原病があり、科学への信頼は失墜していった一方で、1950～60年代に移民がもちこんだ中国の鍼やチベット医学、インドのアーユルヴェーダは、当時勃興していたニューエイジ⁸⁾の全体性という思想と合致したこともあり、移民社会の枠を超えて、ニューエイジャーたちに受け入れられた[Chryssides 2000: 63-64]。現在では、科学的な効能を認められた一部の代替療法は、NHSの一環として利用できる場合もあ

り [National Health Service 2022]、より広範囲に利用されるようになっている。

続いて、イギリスにおける代替療法の制度を確認する。イギリスの代替従事療法者が差し出す名刺には、いくつものアルファベットの略称が並んでいることが多い。これらは民間の協会が認定している資格である。イギリスではカイロプラクティック以外、自由に従事できるが [National Health Service 2022]、大部分の従事者は信用と安全のために何らかの民間資格を有している。代替療法への注目が始まった当初の従事者は、個人で文献を読んだり、実地訓練をしたりして、経験を積み、施術していた。しかし代替療法が広まるにつれ、従事者の質にばらつきが生じるようになった。代替療法への信頼度を上げるため、従事者の質を向上させようと、1990 年前後から民間の協会が設立されていき、現在ではおよそ 550 の協会と資格がある [Wheeler 2004a]。それぞれの協会と提携している教育機関が提供する所定の単位を習得することで、その協会の会員となり、資格を提示できる⁹⁾。信頼度が高い協会であれば、民間の資格ではあっても、患者から信頼を得やすいといえる。

まとめると、イギリスにおける代替療法への関心は、近代科学への不信とニューエイジ運動から始まったが、現在ではより広範囲で取り入れられている。多種多様な代替療法の協会が提供する教育制度と資格によって、イギリスは代替療法の従事者として認められやすい国だといえる。また、イギリス在住者以外でも、イギリスの代替療法の協会の会員となり、その会員であることを掲げて、母国で開業している人もいる¹⁰⁾。

調査を行ったグラストンベリーの状況も記述しておこう。グラストンベリーは、8932 人の人口のうち約 95% をヨーロッパ系白人が占めるという典型的なイギリスの田舎町である [Somerset Intelligence 2013]。もともとは農業や羊皮加工業を主な生業としてきた

が、1970 年頃からヒッピーが訪れるようになり、やがてスピリチュアリティ関連の観光業が盛んになった（詳細は本号掲載の河西の別稿および [河西 2021] を参照されたい）。そのためグラストンベリーでは、代替療法と接する機会が他の町と比べて豊富であり、以下の 3 つの理由から代替療法に従事したり、代替療法を受けたりする人が多い。

第一に、町に 2 つある NHS の診療所のうちの 1 つでは、ホメオパシーや薬草医学、鍼やマッサージ、オステオパシー¹¹⁾ という代替療法を提供している¹²⁾。所長である医師¹³⁾ はホメオパシー医の資格をもち、その他の療法については、専門資格をもつ施術者と提携していて、決まった曜日に診察を受けることができる。ここに勤務するヘルス・ビジター¹⁴⁾ の話では、このようなサービスを NHS の診療所内で提供している町は珍しく、診療所にやってくる患者のうち 20 ～ 25% は代替療法の診察を受けている。

第二に、人口に対する個人的な代替療法の従事者数と種類が多い。職業であれ、副業であれ、趣味であれ、何らかの形で代替療法を行っている従事者は 125 ～ 150 人で、さらに 100 ～ 150 人が散発的に働いているとされる [Wheeler 2004b: 14]。これは、町民約 60 人に対し、1 人の代替療法従事者がいる計算になる。町の中では 142 種類の代替療法¹⁵⁾ が実施されている [Wheeler 2004b: 15]。

第三に、代替療法に触れる機会が多い。通りには代替療法従事者やセンターの立て看板が常時みられる。掲示板には従事者のビラや名刺、ワークショップの宣伝が貼ってあり、店内にもビラや名刺が置いてある。個人が運営する町の情報サイトの中には、従事者のリストが載せられているものがあり、それぞれの従事者やセンターのホームページとリンクしている。さらに『ジ・オラクル』¹⁶⁾ という月刊のフリーペーパーにも代替療法の情報が常時掲載されている。2006 年 5 ～ 9 月の『ジ

・オラクル』を調べたところ、ヨガや武術、瞑想まで含めると、全項目のおよそ3分の1が、恒常的に実施されている代替療法の宣伝だった。

3 ヒーリングとそのエネルギー

本章では、ヒーリングと呼ばれる実践がどのようなものなのか考えてみたい。

3.1 広義のヒーリング、狭義のヒーリング

鈴木は『オックスフォード英語辞典』を用いて、語源から英語のヒーリング (healing) について検討している。それによると、ヒーリングには3つの用法があり、第一の用法として、「蓋をする、覆いをかける」「隠す」「屋根を葺く」などが挙げられている[鈴木 2002: 19]。第二の用法としては、「健康の回復」「病気からの回復」「治療」など現代の用法に近いものが登場し、水やハーブなどさまざまな自然由来のものがヒーリングの力を有していたとある[鈴木 2002: 19-20]。第三の用法には、「修理する」「全体性、幸福と健康、安全性、繁栄の回復」「魂の回復」「救い」などが記載されていて、そこには身体だけでなく、精神をも包括する全体的な生の望ましい状態を回復するという意味が込められており、さらに多様な社会関係の修復、調和の意味ももっていたとある[鈴木 2002: 20-21]。これらを受けて、ヒーリングとは「人間が生きる営み全体の調整に関わり、人々がなんとか日常を周囲のものとともに歩き続けられるよう促す行為」[鈴木 2002: 21]を指すとしている。

このような、治療 (cure) と対になるようなヒーリングを広義のヒーリングとすれば、以下の『ハムリンの補完健康百科事典 (The Hamlyn Encyclopedia of Complementary Health)』における「スピリチュアル・ヒーリング」は狭義のヒーリングだといえる。少

し長いが引用してみよう。

スピリチュアルな源から、必要とする誰かへとヒーリングのエネルギーをチャネル (channel) することは、スピリチュアル・ヒーリングと呼ばれる。チャネルするのは大抵、私たちがヒーラーと呼ぶ人であり、ヒーリング・エネルギーは大抵、ヒーラーの手を通り抜けて患者へと渡される。しかしながら、ヒーリングはヒーラーから来るのではなく、ヒーラーを通り抜けて来る。「スピリチュアル」という言葉は、ヒーラーが同意するところの、外部の目に見えない知的な源から来るエネルギーの神聖な性質を指す。[Bradford ed. 2000: 134]

実際、筆者は調査中、このようにヒーリングが1つの実践として、限定的な意味で捉えられていることに気づいた。以下では、その実践について詳しく述べてみたい。

ある日のインタビューの中で、たとえば、ヒーラーのスティヴは、ヒーリングのプロセスについて図1を描きながら以下のように説明してくれた。

どのようなヒーリングにおいてもヒーラーはエネルギーをチャネルしているんだ。ヒーラーは、グレート・スピリット

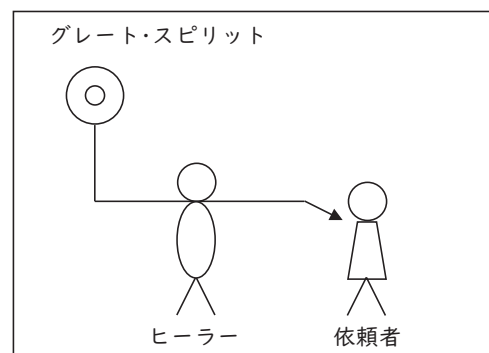


図1 ヒーリングのプロセス
(スティヴが描いた図を筆者が再現)

に、依頼者が必要としているエネルギーを与えてくださいと頼む。スピリットはその人の魂にぴったりのエネルギーを見つける。エネルギーはあつという間にヒーラーの中を通り抜けるから、ヒーラーは自分が何をしたのかは正確にわかっていない。けれど、これがスピリチュアルになるようなヒーリングなんだ。【2006年5月26日、インタビュー】

ここでいう「グレート・スピリット」は、『ハムリンの補完健康百科事典』における「外部の目に見えない知的な源」と同じ意味であろう。ヒーラーがスピリットからエネルギーをもらい、そのエネルギーを依頼者にチャネルして渡すことがヒーリングだという話は、他の多くのヒーラーからも耳にした（写真1, 2）。英語の channel という動詞には、「水路をつくる」とか「溝を掘る」という意味があることを考えると、エネルギーをチャネルするというのは、ヒーラーが水路や溝となって、「グレート・スピリット」からのエネルギーを水のように依頼者へ流しているイメージであるといえよう。

さらに別のヒーラーのヘイゼルの次のように話した。

ヒーラーは宇宙からもらったエネルギーを、自分の身体を通して、他人に渡す

チャネラーなの。ヒーリングっていうのは、エネルギーの不足している人にエネルギーを渡すことなの。エネルギーの淀みを弾いて、パチンと割ることもあるわ。それによって相手はスピリチュアルなバランスの取れた状態になるのよ。ヒーリングの目的はバランスなの。【2006年、日常会話】

彼女の話から、エネルギーを受け取ることによって依頼者はスピリチュアルなバランスの取れた状態を回復することができ、それがヒーリングだと考えられていること、ヒーラーとはエネルギーの媒介者とされていることがわかる。

スティーフやヘイゼルの語る「ヒーリング」は、まさに『ハムリンの補完健康百科事典』がいうところの「スピリチュアル・ヒーリング」である。

3.2 ヒーリングのエネルギー

ヒーラーたちは「エネルギー」という言葉をよく口にする。しかし、ここでの「エネルギー」は、科学的な意味とは異なる。それでは、彼らはエネルギーをどのように考えているのか。そのエネルギーはどこから来て、どのようにして依頼者の中に入っていくのか。ヒーラーたちのヒーリング・エネルギーに対する考え方について、3段階に分けてみていく



写真1 個人のヒーラー宅にあるマッサージ用のカウチ（2006年8月10日河西撮影）



写真2 体に手をかざし、ヒーリングを行っているヒーラー（2006年8月26日河西撮影）

い。

第一に、ヒーラーには、エネルギーを温かく粘着性のあるものとして感じることができ、オーラ写真¹⁷⁾やペンデュラムで見ることができる人と語る人が少なからずいた。エネルギーを感じる方法の1つは、手を使うことだ。4.2で取り上げるソフィーによれば、まず自分自身に意識を集中し、つぎに両掌を合わせ、手を中心に少しずつ掌を開いていくことで感じられる。筆者も試してみた。何か感じるかと聞かれたので、何か温かく、ねっとりとした、弾むようなものを感じると答えると、「それがエネルギーだよ」と言われた。手を動かすと熱さが変わるのだが、これはエネルギーには層があり、層によって熱さが違うからだと説明された。エネルギーは熱をもち、その人の周りにオーラとしてあるので、オーラ写真を撮ると、その人のもつエネルギーを視覚的に見ることができるとも聞いた。ラスコーのように古代人が描いた洞窟の絵の人物の背後にオーラが見えるのは、古代人がオーラを見ることができたからと言われた。

エネルギーを見る別の道具はペンデュラムだ。形状はさまざまだが、たとえば水晶のついた長い木の棒と小さな木の棒を輪でつないだものがある。あるヒーラーの自宅で、右手で小さな棒をもち、左手の親指の少し上に水晶をかざすように言われた。しばらくすると、水晶は時計回りに回転し始めた。他の指でも同様に試してみると、中指と小指では時計回りに、人差し指と薬指では反時計回りに回転した。このヒーラーによると、人によってエネルギーが異なるため、回転の方向も人それぞれである。

第二に、筆者が出会った多くのヒーラーは、エネルギーは神やスピリットガイドといった高次の存在（以下、『ハムリンの補完健康百科事典』における「外部の目に見えない知的な源」と同義で扱う）やグラストンベリーの大地から来ていると考えていた。ある女神運

動¹⁸⁾に携わるヒーラーは女神からのエネルギーをチャネリングしているが、天使のヒーリングを実践するときのエネルギーは天使の世界から来ていると言った。ある霊気マスターは霊気のエネルギーは宇宙からのものだと考えていた。また、別のヒーラーは、エネルギーの源は、神、コスモス、宇宙、グレート・スピリット、キリストの意識など、いろいろな名前があるが、同じ存在だとみている。

多くのヒーラーは、聖地の特別なエネルギーを信じており、グラストンベリーは非常に強いエネルギーが存在する特別な場所だと考えている。ヒーリングを主収入とする、ある人は、グラストンベリーを訪れる理由について、「グラストンベリーのエネルギーを得て、生き返りたいから来た」と語った。ヒーラーたちは、グラストンベリーは強いエネルギーを発する場所であり、このようなエネルギーが尽きることはないため、ヒーラーとして活動しやすいと考えている。

第三に、通常ヒーラーは、エネルギーを得た後、そのエネルギーを依頼者に送る。自分はエネルギーのチャネラーであり、そのチャネラーの身体を通してエネルギーは依頼者の体に入ると考えている。その際、エネルギーがヒーラーを経由するため、ヒーラー自身もヒーリングを受けることになる。

ヒーリングの依頼者は、エネルギーが不足している人、エネルギーのバランスが崩れている人、エネルギーの流れが滞っている人である。ヒーラーが依頼者にエネルギーを流すと、その人のエネルギーの状態のバランスが回復し、体内の障壁が取り除かれ、依頼者は再び元気になる。

まとめると、ヒーラーたちの多くは、ヒーリング・エネルギーは目に見えないが、そこに存在する、そのエネルギーは熱をもち、弾力性がある、オーラ写真やペンデュラムを使えば目に見える、エネルギーの源は高次の存在で、自分は得たエネルギーを依頼者に流すだけだと考えている。

エネルギーの宝庫であるグラストンベリーは、ヒーラーがエネルギーを得やすく、ヒーリングに適した場所である。彼らにとってのヒーリングのエネルギー源は、高次の存在と土地の両方である。しかし、このようなヒーラーは、高次の存在に対する考え方が汎神論的であることが多い。つまり、高次の存在と土地あるいは自然を同じものと考えているため、区別しづらいこともある。

3.3 キリスト教と女神運動のヒーリング

このようなヒーリングについて、筆者が参与観察した事例を2つ挙げてみよう。グラストンベリーには複数のキリスト教の教派がある。そのうち、イングランド国教会とローマ・カトリック教会が毎週、メソジストと合同改革教会¹⁹⁾ではグラストンベリーあるいは周辺のいずれかの町の教会で毎月、ヒーリングが行われている。1つ目の事例として、イングランド国教会のものを紹介しよう。

ヒーリングは毎週火曜日の午前10時半～12時半まで、町に2つあるイングランド国教会の教会のうち、大きいほうの聖ジョン教会内の礼拝堂で行われ、無料である。1985年に赴任した牧師の妻がヒーリングに興味をもっていたことから始まった。退職したグラストンベリー在住の女性信徒を中心に、約30人がボランティアとして訓練を受けて登録している。筆者は3回見学したが、以下の記述はそのうちの1日のフィールドノートにもとづく。

私とボランティアの女性2人は、礼拝堂内の十字架のある祭壇の前に座っていた。この十字架はイエス・キリストを表しているようだ。じきに、教会の女性信徒が礼拝堂にやってきた。彼女は腰痛に悩む夫のため訪れたのだが、2人のボランティアは依頼者の両脇に座り、少し話をした後、全員で祈り始めた。2人のボランティアが片方の手を依頼者の背中

に当て、もう片方の手を自分の膝に当て、掌を上に向けた。依頼者は両手を膝の上に置き、掌を上に向けた。祈りの間、ボランティアの1人が時々、神がそこに来るように、依頼者の夫のもとに来るようにと祈りを唱えた。20分ほどで終了し、依頼者は笑顔で帰路についた。【2006年7月4日】

キリスト教のヒーリングは、聖書にキリストがヒーリングを提供したと書かれていることが根拠となっている。しかし、教会内でヒーリングを行うようになったのは、1960年代以降にキリスト教の枠組みの外でヒーリングが盛んになり、その状況にキリスト教も触発されたからだ、あるとき親しくなった地元出身で合同改革教会の牧師を務める女性は語った。

直接、またはヒーラーを務めるボランティアや聖職者を通して、神あるいはキリストからヒーリングのエネルギーが依頼者に届くと考えられている。神やキリストはどこにでもいるとされているので、その場にはいない人にもヒーリングを届けることができる。つまり、自分がヒーリングを受けていることに気づかない人もいる。

筆者の観察によると、礼拝堂でキリストの十字架のある祭壇の前に座り、なおかつヒーラーたちは依頼者の両側に座っていた。ヒーラーは片方の掌で神あるいはキリストのヒーリングを受け、もう片方の掌で依頼者に渡しているように見える。依頼者は、ヒーラーと自分の掌の両方向からヒーリングを受け取ることができ、彼女の夫は妻を通して、または神から直接、予告なしにヒーリングを受けている。

2つ目の事例として取り上げる女神運動だが、グラストンベリーでも、1990年代に当地を女神の聖地とみなす1人の女性が始め、2002年には町の中心部にある建物の一室に女神神殿(The Goddess Temple)を開い

た²⁰⁾。この女神神殿において、毎月、新月の日の午後2時～4時にヒーリングが行われている。依頼者は気持ちを寄付金として箱に入れる。女神神殿のヒーリング担当者によると、2004年に彼女が始めた。当初は第4金曜日に行っていたが、新月の夜からエネルギーが強くなるため、ヒーリングに適していると考え、実施日を変更した。

筆者の6回の参与観察のうち、集まったヒーラーは4人や2人のこともあったが、通常3人だった。この3人は女性2人と男性1人で、いずれもグラストンベリー在住である。先述のこのヒーリングを始めた女性は、グラストンベリー女神運動に携わっていて、霊気マスターであるとともに、NFSH（注10参照）の会員だが、両ヒーリングの基本的な考え方は似ているため、併用できると考えていた。もう1人の女性は女神運動とは無関係だが、やはり霊気マスターで、歌のヒーリングを教えている。男性は女神運動に関わっており、シャーマン式ヒーリングを実践している。以下はフィールドノートに記したヒーリング体験にもとづく。

私の番になり、女神神殿のヒーリング空間と待つための空間を仕切っている紫のカーテンを開けた。ヒーラーたちと挨拶や自己紹介をした。祭壇と大きな女神の絵の前にあるマッサージ用のカウチに横たわるように言われる。カウチには紫色のきらきらした布がかけられていた。ヒーラーの1人が耳元で囁く、「特定のスピリットガイドか女神はいますか？」

この問いに対して、私はヒーリングの女神「ブリジット²¹⁾」と答えた。続いて「とくにヒーリングをしてほしいところはありますか？」と尋ねられた。私は乾燥した首筋を見せて、「乾燥肌」と答える。彼女は「それはよくないわ…。あなたの身体を触ってもいいかしら？」と尋ねたので、私は「はい、お願いしま

す」と答える。そして、ヒーリングが始まった。

まず、目をつぶるように言われ、「アヴァロンの女神、9人のモーガン²²⁾、ブリジット、どうかエリコ（＝筆者）のためにここにいてください。どうか私たちを癒してください」と祈り始める。私は誰かの手が頭に、別の人の手が腕に、また別の人の手が足に触れているのを感じた。その手はとても温かかった。身体のいろいろな部位にも手を当ててくれた。すると突然、パチパチという音が聞こえた。少し目を開けると、ヒーラーたちが腕を上下に動かし、私の身体の上で何かを掃いたり、折ったり、巻き取ったりしている様子が見えた。私はまた目を閉じた。しばらくすると、シンギングボウル、カウベル、ガラガラなどの楽器の音が聞こえてきた。ヒーラーたちはこういった楽器を演奏しながら、私の周りを歩き、ときどき「ウー—」というお経のような声を出していた。夢の中にいるような気分で、半分うとうとしていた。そのうち、初めに話しかけていたヒーラーが、「アヴァロンの女神、9人のモーガン、ブリジット、私たちとともにいてくれてありがとう、私たちのヒーリングを助けてくれてありがとう」と言った。私は上体を起こし、ヒーラーにお礼を伝えた。2人のヒーラーとハグをしていたら、もう1人が水をもって来てくれた。15分ほどのことだった。【2006年7月25日】

キリスト教のヒーリングとは対照的に、女神運動のヒーリングでは、エネルギーは彼らが信仰の対象とする女神だけから来るとは考えられていない。ヒーラーから「特定のスピリットガイドか女神はいますか？」と聞かれたように、依頼者が希望する存在から受け取ることでもある。

またカウチは女神の絵と主祭壇の前にある

が、ヒーラーは依頼者を囲むように立っているため、依頼者が女神像に背を向けることもある。いつも正面の祭壇を向いている、キリスト教の礼拝堂では起こらないことだが、問題とはされていない。

さらに、観察とインタビューから女神神殿のヒーラーたちは、依頼者1人ずつのエネルギーの状態を見極めていたことがわかった。具体的には依頼者の身体の上で手を動かして、エネルギーの状態を把握し、エネルギー・フィールドを撫でる。そして、異変を感じた部位にエネルギーを注ぐ。何かが滞っていると感じたら、その滞っているところを叩いたり、巻き上げたりする。道具を用いてエネルギー・フィールドを開き、直接エネルギーを入れて、依頼者をリラックスさせることもある。依頼者によってエネルギー・フィールドが違うので、内容も微妙に異なるようだ。

ここまでの話をまとめると、キリスト教の教会はキリスト、女神神殿は女神やスピリットガイドなどが高次の存在であり、その存在からエネルギーをもらっている。そして、キリスト教のヒーリングではただエネルギーを注いでいるが、女神神殿のほうではヒーラーが霊気その他、歌やシャーマン式のヒーリングを身につけており、依頼者のエネルギーを査定したうえで、ヒーリングを実施していた。

4 代替療法従事者となった転機とその過程

前章まで、イギリスとりわけグラストンベリーでは代替療法が盛んで、関わる機会も多いことをみてきた。また、代替療法の1つとしてのヒーリングについて、フィールドワークにもとづき記述した。それらを踏まえて、本章では代替療法に従事している個人に焦点を当てる。とくに携わる代替療法や移住理由に注目することで、代替療法に携わっていくようになる過程を探ることを目的とする。

公式なインタビューを実施した代替療法従事者11人のうち、まずは代替療法を主な生計手段とするなど、代替療法に割く時間が多い、西洋薬草医ニコラスと霊媒師のポーラ、前世療法を行うリサの3人を取り上げた。また長年、看護に携わってきたソフィーは、インタビュー当時、仕事はしていなかったが、看護師や看護学部教員として代替療法を用いる機会が多くあったことから加えている。

事例1 西洋薬草医ニコラス（40代後半イギリス人男性）

2006年8月22日、ニコラスの自宅でインタビューを行った。

ニコラスは医者の家系に生まれたので、ゆくゆくは医療関係の仕事に携わることを考えていたが、大学では東洋哲学を専攻した。その後の数年間を中東で英語教師として過ごす。そのとき、中東に伝わる薬草医学に出会い、正統医療より健康に対する見方が広いことを面白く感じる。帰国後に専門の学校で薬草医学を学び、1981年に資格をとり、ある都市で開業した。それぞれの患者に合わせて、植物からの抽出液であるチンキを混ぜ合わせた薬を処方している。なお、2005年の春までの2年間、メディカル・ハーバリスト国立協会（National Institute of Medical Herbalists）²³⁾の代表を務めていた。

従事している代替療法は薬草医学だけだが、鍼やオステオパシーなどは証拠にもとづいているから信用できると考え、患者として受けている。ヒーリングは証拠が不確かなので信用しづらく、試しに一度受けてみただけである。

グラストンベリーには20年ほど前に越してきた。もともとは近隣のある都市に暮らしていたが、田舎で子供を育てたかったため、移住してきた。以前から開業していた都市や別の都市でも開業しているので、そのちょうど中間地点にあるグラストンベリーは通勤にも便利である。グラストンベリーへの移住と

薬草医学への従事の間にとくにつながりはないという。「この場所に強いエネルギーがあるかどうかはわからないけど、患者の中にはそのような事柄を信じている人もいるから、オープン・マインドであろうとはしているよ」と話す。

ちなみに、東洋哲学を学んでいた学生時代、禅に興味をもち、中国人の師についており、当時は毎週1回、グラストンベリーで禅のクラスを開いていた。禅は自分の人生に大きく影響しており、とくに仕事のやり方には関係している。一方で、薬草医学と禅の間に直接の関係はないと言い、薬草医学は仕事、禅は私生活と切り離しておきたいと話す。

事例2 元看護師のソフィー（50代後半イギリス人女性）

2006年7月15日、ソフィーの自宅でインタビューを行った。

ソフィーはもともと医療関係の仕事に興味があり、20代前半で看護師になり、看護師長にまでなった。後に、NHSに勤務したが、その機関が大学に吸収されたため、大学の看護学部に移った。しかし、患者に有益な研究より、金儲けにつながる研究が奨励される風潮が次第に強まっていき、このような風潮に嫌気がさして早期退職した。

病院で働いていた頃、治療方針が決まるまでの間、救急患者たちが何の手当てもされずに苦しんでいる姿を目の当たりにしていた。彼らの苦しみを看護師の立場から和らげる方法を探したところ、催眠療法や心理療法に出会い、講座を受講した。その後、セラピューティック・タッチ²⁴⁾やアロマセラピー、リフレクソロジー²⁵⁾やカウンセリングの講座も取った。病院を退職後、自宅で催眠療法や心理療法を行っていたこともあった。そのときには、患者をリラックスさせるために、リフレクソロジーやアロマセラピーを使うこともあった。「テクニックをばらばらに使うのではなく、それぞれの依頼者に合わせて使う

ことが大切だと思う」と言い、他の療法も含めてヒーリングとみなしていた。ソフィーの考えるヒーリングとは、「1、(ヒーリングに)集中。2、(エネルギー・フィールドの)査定。3、エネルギーを直接入れるために、エネルギー・フィールドをかき乱す。4、エネルギー・フィールドを撫でつける」ことで、つまりはエネルギー・フィールドを正常に戻すことである。

早期退職を機に、近隣の都市からグラストンベリーに移住した。これまでもグラストンベリーをたびたび訪れていて、当地でのさまざまなスピリチュアルなイベントを気に入っていたが、「よいエネルギーだけでなく、悪いエネルギーもある」ことから、住むことには気が進まなかった。しかし、10代の娘がグラストンベリーを気に入っていて、自分も気分転換を図りたかったこともあり、越してきた。移住後、以前より町のエネルギーがよくなっていると感じていて、グラストンベリーはエネルギーの強い特別な場所だと話す。現在は「充電中」で仕事はしていないが、スピリチュアルな事柄に関心をもつ人と話すことで刺激を受けることが多く、「以前から考えていた思考とエネルギーの関係について何か書こうかと思っている」と言う。

事例3 前世療法²⁶⁾を行うリサ（50代前半イギリス人女性）

2006年6月7日、リサの自宅でインタビューを行った。

大学時代のリサは、生物学を専攻していて、とりわけ神経生理学に興味をもっていた。当時はまだ心理学が一般的に知られていない時代だったので、意識の自然性、覚醒、神智学、催眠療法といった分野の本を読み漁っていた。和尚ラジニージと名乗る、アメリカ合衆国で活動していたインド人男性をスピリチュアル・マスターと考え、アメリカ合衆国のコミュンまで会いに行ったこともあった。30歳の頃、「主流からドロップ・アウト

して」、スピリチュアルな事柄に興味が向かった。

まず、全身マッサージやインド式頭部マッサージ²⁷⁾、リフレクソロジーや NFSH のヒーリングを学び、仕事にした。この仕事を通じ、非身体的なエネルギーと出会った。西洋で霊気²⁸⁾が広まる以前の時代だったので、本を読んだり、友達と話し合ったりしながら、微細な非身体的なエネルギーについて、自分なりに学んでいった。ヒーリングをするときには自分のエネルギーをあげてしまうと疲れるので、「ユニヴァーサルなエネルギーを得なくてはならないの」と話す。身体、精神、感情、スピリチュアルな側面は互いにつながりをもっているが、そのことを理解しない人々は、体内のバランスが崩れて、ストレスがたまり、病気になると考えている。ある日、前世での知り合いに、偶然出会ったことが引き金になって、「前世からの記憶が意識の表面に押し出されてきて」、その夜、前世の夢を見た。このことを契機に、前世という概念に関心をもつようになり、前世療法に関わっていくことになった。

数年前、当時住んでいた家から立ち退きを迫られ、グラストンベリーに住んでいた友人を頼ってやってきた。「これまで3回の前世において私はグラストンベリーに暮らしていた。それで、ヒーラーのようなことをやっていたから、その能力を取り戻すために、この場所に戻ってきたんだって、今では思っている」と話す。最近では、身体的に疲れるのでマッサージはやめているが、前世療法で補助的に用いることもある。また、本の執筆や絵画の創作活動に力を入れ、ヒーリングのワークショップも開いている。

事例4 霊媒師のポーラ（40代前半イギリス人女性）

2006年6月8日、手紙で質問への回答をいただいた²⁹⁾。

ポーラは霊媒師である。グラストンベリー

出身だが、近隣の都市で生活しているときに、自分が死者のスピリットと交信できる能力をもっていることに気づいた。この能力は生まれつきのものだったが、それを受け入れて、自分の人生に取り入れるようになったのは、息子が不登校になった34歳のときだった。死者のスピリットやこのような事柄に関心のある人たちと一緒に過ごして、死者のスピリットとの関わり方を学んだ。

手紙によると、6年前、両親の面倒をみるためにグラストンベリーに戻ってきた。現在、代替療法を行うセンターで働いている。そこでは、依頼者、依頼者のスピリット、ポーラのスピリットで会話をし、依頼者の抱えている問題を解決する。「私の行っている霊媒は、心靈主義運動に関係していて、グラストンベリーでみられる、おもにニューエイジ的な事柄とはまったく関係がありません」と言う。タロット占いなどのニューエイジ的な事柄を仕事で使うこともあるが、自分のスピリットが必要な助けをすべて与えてくれるため、他の人からヒーリングを受けることはない。

4つの事例には、共通点が2つある。1つ目は、初めて代替療法に携わるようになるのは、グラストンベリー以外の場所だったという点である。ニコラス、ソフィー、リサは代替療法を学んでから、グラストンベリーに移住している。グラストンベリー出身のポーラも、町を離れていた間に霊媒の能力があることに気づき、霊媒師としての訓練を積んでいる。2つ目は、グラストンベリーの特殊性にひかれて移住してきたわけではないという点である。ソフィー、ニコラス、ポーラは家族のため、引っ越してきた。また、リサは移住を迫られて、偶然友人がいたこの町に越してきている。

相違点も挙げてみる。まず、近代科学にもとづく医療をバックグラウンドにもつ従事者とそうでない従事者との違いは、近代科学の

証拠や診断を重視するか否かである。ニコラスは「鍼やオステオパシーなどは、証拠にもとづいている」ため信用できると言うが、ヒーリングは信用するのが難しいと言う。ソフィーはヒーリングを行うときには、診断や査定が重要だと繰り返し話していた。それに対して、前世を対象にしたリサの前世療法や、スピリットとの交信というポーラの霊媒としての能力に証拠や診断を求めることは難しいだろうから、この2人は近代科学というものをそれほど重視していないといえる。

ヒーラーを名乗る者とそうでない者の違いもある。1つ目はグラストンベリー観である。ニコラスとポーラは、自分たちの携わる療法および移住の理由とグラストンベリーの特殊性の関係を否定している。それに対してソフィーやリサは、グラストンベリーの特殊性を認め、自分自身の生き方に関係づけている。以前は町のエネルギーがあまりよくないと考えていたので移住する気になれなかったとか、引っ越してみたらよいエネルギーでよかったというソフィーの話からは、彼女の生活がグラストンベリーの特殊性に影響されているといえる。また、移住後に前世からの縁でこの町にやってきたのだと考えるようになったリサは、当地に暮らすことで、前世で獲得したヒーリングの能力を取り戻しつつあると考えている。これは、グラストンベリーに移住してきた理由について、グラストンベリーの特殊性をその根拠に用いながら、後から意味づけているといえる。

2つ目は代替療法の習得方法と携わっている代替療法の数である。ニコラスは学校で薬草医学を、ポーラは友人と死者のスピリットとの関わり方を学び³⁰⁾、ニコラスは薬草医学だけ、ポーラは霊媒とタロットだけに従事している。「タロットを読むとき、スピリットの助けを借りるけれど、それを依頼者に伝えることはない」と話し、霊媒としての実践にタロットを補助的に用いている様子が伺えるが、タロットはニューエイジ的だと言って、

心情としては心霊主義ときっぱり分けているようだ。

それに対してソフィーとリサは、他者との関わり合いに刺激を受けつつ、自分で選んだいくつもの療法を身につけていく。新たな療法と出会い、その概念を学んだからといって、以前に学んだ療法の概念を否定するのではなく、それぞれの療法を要素として依頼者に合うように組み合わせて、独自のヒーリング体系を創り出していく。

一方、薬草医学や心霊主義は、それ以上新しい概念を取り入れる余地をもたないので、ニコラスとポーラにとって、「スピリチュアルな場」に暮らすことの意義は小さくなってしまう。また、根拠がそれぞれ植物の成分や死者のスピリットなので、グラストンベリーのエネルギーの重要性も小さい。

5 おわりに

本稿では、キリスト教と女神運動の実践、および代替療法の従事者が代替療法に携わっていく過程をみていった。キリスト教のヒーリングではキリストからのエネルギーを送るというように単純化されていたが、女神運動では依頼者のエネルギーを査定するというようにやや複雑化していた。携わるヒーラーたちも複数の療法を習得し、それらを同時に使用していた可能性もある。また、薬草医や心霊主義の霊媒は、実践に携わる際、それぞれの体系において、同じ関心をもつ仲間と、比較的長期にわたって学んでいく。しかし、女神神殿のヒーラーや、催眠療法や心理療法、前世療法に携わるヒーラーの場合、複数の代替療法を習得し、さまざまに組み合わせていることがわかった。キリスト教以外のヒーラーは、ボウマンの言うように、スピリチュアル・スーパーマーケット [Bowman 1999] の店内で、ショッピング・バスケットの中へ好みの療法をつかみ入れ、混ぜ合わせているといえる³¹⁾。スピリチュアル・スー

パーマーケット論に当てはまるか、当てはまらないかには、何が影響しているのだろうか。

筆者はそもそもニューエイジ志向か否か、という点が関係していると思う。ここでいう「ニューエイジ志向」とは、ニューエイジャーというわけではないし、自らがそう自覚しているわけではないが、そのような事象を好む傾向があるという意味である。具体的には、組織立った事柄を好まず、自らが有益と考える多様な事柄を取り入れ、人間は変化していくという前提のもと、自己の変化に関心があることである。女神運動や、ソフィーとリサの生き方や考え方はニューエイジ志向であるが、キリスト教は堅固な組織があるし、聖書にもとづく教義もあるという点でそうではない。明確に否定しているポーラはもちろんだが、禅と薬草医学を分けたいというニコラスも、自宅の雰囲気から考えてもニューエイジ志向ではないように思えた。このようなニューエイジ志向か否かが、グラストンベリーという土地の特殊性を自らの療法と結びつけるか否かにも関係していたと思われる。

ヒーリングをはじめとする代替療法は、ニューエイジに関心をもつ人々の間から広がり、その後、より広い範囲で利用されていると第2章で記した。この傾向は現在、利用者のみならず、代替療法従事者のほうにもみられるといえるのではないか。これはキリスト教の教会でのヒーリングが盛んになったのは1990年代からという話にも合致する。

ニューエイジ志向の薬草医や霊媒の場合、ソフィーやリサのように、ヒーラーを名乗り、複数の療法を取り入れる傾向がみられる可能性もある。とくに心霊主義の教会では、キリスト教の教会と同様に「ヒーリング」の時間が設けられている。これらの点については今後の研究課題としたい。

付記

本稿は2006年度、京都大学大学院人間・環境学研究科に提出した修士論文「ス

ピリチュアルな日常を生きる——英国グラストンベリーにおけるヒーリング実践と女神運動を事例に」の第4章に、*Journal of Spiritualities and New Age Studies (JASNAS)*に掲載されるはずだった論文 *Healing in Glastonbury* の一部を書き加え、その後、査読者の指摘に沿って、大幅に修正したものである。JASNASには2007年に掲載されるはずであったが、編集者から掲載の延期を告げられたまま、雑誌は2012年に休刊となった。データを収集した2005～2006年以降も筆者はグラストンベリーで調査を続けているが、本稿で取り上げたような代替療法従事者の調査はほぼ実施しておらず、調査時点の状況の記録にもなっている。ここで詳しく取り上げた人々の状況は、本稿を執筆している2022年現在、大きく変化し、代替療法に携わっていない者、グラストンベリーを離れた者もいる。そのため、個人の特定が難しくなっており、個人情報の保護にもなっている。

〈注〉

1) 非西洋諸国を対象にする研究では、西洋からやってきた近代医療 [板垣 2003; 吉田 2000]、現代医療 [白川 2001]、または世界医学 [ロック 1990] に対して、それ以外の地域の医療を民間医療 [板垣 2003; 白川 2001]、伝統医療・民俗医療 [吉田 2000]、または伝統医学 [ロック 1990] と呼んできた (ロックの著書の翻訳者は *medicine* を医学と訳したようである)。しかし、このような名づけ方は西洋諸国で調査をする際には有効でない。なぜなら、西洋諸国においては、近代科学にもとづいた医療 (いわゆる医学にもとづく正統医療) に対する医療として、自国の伝統医療だけでなく、異文化の伝統医療も含んでいるからである。

西洋諸国では近代科学をもとにした医療に対し、補完代替医療 (complementary and alternative medicine, 略称 CAM) という語が用いられることがある。医療に従事する

人々がよく使用するためか、定量的な証拠を重視するという姿勢がみてとれる。この姿勢は近代科学に基盤をおく療法の姿勢と同じであり、水晶療法や手かざし療法など、定量的な効果を証明しにくい一部の療法を排除してしまう。そこで本稿では、「代替療法 (alternative therapy)」という語を用いたい。この語を用いれば、近代科学をもとにした医療、すなわち正統医療以外のすべての身体や精神の不調を改善するために行われる行為を含むことができると考えるからである。

2) ここでいう「ホリスティック・ヒーリング」とは、身体、精神、スピリットを1つのパッケージとみなすようなヒーリングである。このヒーリングの形式は多種多様だが、個人での探求、相関性、共時性、生まれ変わり、スピリチュアル・マテリアリズム、ヒーリングの必要性、といった、上記のような考え方のパッケージが、表面的な多様性の根底にあり、それが共通の価値観となっている。[Bowman 1999: 183]

3) 後述するオステオパシーの頭蓋骨の領域に対する施術。オステオパシーの創始者の直弟子が開発した。

4) 19世紀のアメリカで発達した宗教の1つである。心霊主義者たちは、死者のスピリットの存在を信じ、個人的、あるいは教会などの場で、死者のスピリットと交流できる霊媒師から、定期的に死者からのメッセージを伝えてもらっている。

5) 口をつぐんで真言を唱えるなどして、精神的、肉体的に自己を解き放つことを目指す瞑想。インド人のマハリシ・マヘーシュ・ヨーギー (1918-2008) によって1950年代に知られるようになった。

6) 19世紀前半、ドイツ人医師ザムエル・ハーネマン (1755-1843) が始めた。ある病気を引き起こす成分を高度に希釈し、砂糖に混ぜたレメディを薬として用いる。イギリスでは大手薬局チェーンで販売されるなど人気が高い。しかし、科学的にはただの砂糖玉

で、プラセボ効果以上の効能はないとされる。

7) オーストラリアの俳優、フレデリック・マサイアス・アレクサンダー (1869-1955) が20世紀初頭に始めた。無意識に行っている体の使い方を見直すことで、肩こりや腰痛、ストレスや疲労といった症状からの解放を目指す。

8) 社会学者のマイケル・ヨークは、「ニューエイジとは多様な集団やアイデンティティを含む概括語であることは間違いない。(中略) ニューエイジとされる多様な構成要素を結びつけるものは、何よりもまず人間の潜在能力を個人的かつ集合的に発展させることで、大規模で普遍的な広がりをもつ変化をもたらすことができるという期待である」[York 1995: 1-2]と記している。同じく社会学者のポール・ヒーラスは、「ニューエイジ」という言葉に含まれるような具体的な実践として、秘教または神秘主義的な仏教・キリスト教・ヒンドゥー・イスラーム・道教、ケルト・ドルイド・マヤ・ネイティヴアメリカンインディアンなどのペイガンの教え、禅瞑想、ウィッカの儀式、啓発集中セミナー、管理のトレーニング、シャーマンの活動、野外イベント、スピリチュアルセラピー、積極思考の形式などを挙げている [Heelas 1996: 1]。端的に言えば、1960～1970年代のアメリカから始まった疑似宗教的な流れであり、個人の意識の変革が、社会、地球、宇宙の変化につながると考える自己意識運動である。組織化されず、ネットワーク的に広がっていったことも特徴の1つである。

9) たとえば、薬草を用いた治療行為に従事するには、ドイツでは、日本と同じように正統医療の医師免許を取得する必要がある。しかしイギリスではメディカル・ハーバリスト国立協会などの協会が認定した教育機関で3年以上をかけて所定の単位を取得すれば、協会から認められ、会員になることができる。

10) 2005～2009年にかけて、テレビ朝日で放映されていた『国分太一・美輪明宏・江

原啓之のオーラの泉』で一躍有名になったスピリチュアル・カウンセラーの江原啓之(1964-)はスピリチュアル・ヒーラー国立協会(National Federation of Spiritual Healers, 略称 NFSH)の会員である。

11) アメリカ人医師アンドリュー・テラー・スティル(1828-1917)が19世紀後半に始めた。身体は1つのユニットであるという思想のもと、骨格、筋肉、靱帯、血管、リンパ、神経、脳脊髄液など、あらゆる組織に対して、手を使って働きかけていく。

12) これは2006年当時の状況である。2017年以降、ホメオパシーは科学的な証拠がないとして、NHSでの提供がなくなっている。2006年当時この診療所では、希望すれば代替療法も受けられ、鍼とオステオパシーは無料、それ以外は10ポンド(2006年当時、約2000円)であった(代替療法はNHSの枠組みの外で提供されるほうが一般的だが、その場合、30～50ポンド(2006年当時、約6000～10000円)程度かかっていた)。しかし、2022年11月現在、代替療法を提供している診療所はグラストンベリーにはない。

13) NHSが運営する診療所には、複数の家庭医が所属していることがふつうである。

14) イギリスの医療職の1つである。看護師の資格をもち、地域社会において、とくに乳幼児をもつ家庭の相談と支援を担当する。

15) たとえば、町でもっとも知られた代替療法専門のセンター、ブリジット・ヒーリング・センターでは、タロット、占星術、ルーン文字占い、夢占い、鍼、指圧、霊気、全身マッサージ、インド式頭部マッサージ、リフレクソロジー、脊椎ワーク、カウンセリング、心理療法、サウンド・ヒーリング、アロマセラピー、スマッジング、ホピ式耳ろうそく療法、シャーマン式ヒーリング、チャクラ、中心エネルギー統御、天使セラピー、感情解放術、高度知覚読み、前世療法の24種類を提供している。

16) 町の各種イベントやワークショップを掲

載しているフリーペーパーで、町の店やセンターで手に入る。A4サイズで12ページないし16ページある。

17) オーラ写真では、コンピュータにより生体エネルギー(オーラ)を測定し、写真上に表現することができる。オーラの色は環境や心理によって変化する。

18) ここでいう欧米における現代の女神運動とは、1970年頃、第二波フェミニズムの時代に始まった。当時、父権的なキリスト教の神に対する、力強い女性の象徴として、女神や魔女に関心をもつようになったフェミニストの一部が、現在、女神崇拜、あるいは女神運動と呼ばれる信仰を創った。

19) 1972年に長老派と会衆派が統合してできた United Reformed Church, 略称 URC。なお、スコットランドでは統合しておらず、スコットランド国教会は長老派である。

20) この女神運動の詳細については、河西[2015] 参照。

21) ブリジットは、アイルランドのキルデアに生まれたキリスト教の聖女(453-523)であり、ケルト神話における火、光、井戸、ヒーリングの女神である。現代の女神崇拝者からはどちらのブリジットも女神とみなされ、とくにヒーリングを司るとされている。そのため、ヒーリングの場でブリジットはよく召喚される。

22) 9人のモーガンは、グラストンベリーの別名アヴァロンを司る妖精で、アーサー王伝説に登場する。もっとも有名なのは、アーサー王の異父姉であるモーガン・ル・フェイだ。この当時のグラストンベリー女神運動では、彼女らがアヴァロン、つまりグラストンベリーの女神だとされていた。

23) 協会のホームページによると、本協会の前身となる機関は1864年に設立されている。この協会のメンバーになるためには、協会の基準を満たす認定教育機関でハーブ医学のコースを修了する必要がある。イギリスの学部教育は3年間だが、同じく3年間の学

習が最低でも要求され、学士と同等の資格とみなされている。2022年11月現在、認定教育機関は3校ある。

24) エネルギーの流れを意識しながら、患者の体に触れたり、手をかざしたりする実践で、国によっては、医療現場やホスピスで看護師などが行っている。

25) 英国式足裏健康法と訳されることもある、足裏をもみほぐすマッサージ。

26) 人間が前世から現世にまで引き継いでいる記憶には、技や能力など役に立つ記憶もあるが、困難な経験など現世に悪影響を及ぼしているものもある。このようなネガティブな経験を癒すために、前世療法では依頼者を催眠状態にし、場合によっては、高次の存在とつながりをつくりやすくして、前世の経験を思い出す手助けをする。辛い経験を認めることが、依頼者の状況の向上につながるとされる。

27) アーユルヴェーダ由来のマッサージ。頭部と肩をもみほぐす。

28) 日本人の臼井甕男（1865-1926）が始めた手かざし療法。日系ハワイ人の孫弟子やその弟子によって、西洋諸国に広まっていった。

29) ポーラとは2005年11月21日に直接話をしている。2006年に正式なインタビューを申し込んだところ、家族の世話で忙しいため、手紙での回答にしてほしいと言われた。その後一度、直接会話をしている。

30) 心霊主義の霊媒は、少なくとも初めのうちは、心霊主義教会に行き、そこで霊媒たちと交流しながら、学んでいくことが多い。ポーラもこういった教会で友人と過ごしていた可能性もある。

31) 「ショッピング・バスケット」の言葉は、2006年5月5日のボウマンとの面談の際に、彼女が口にした言葉である。

〈参考文献〉

- 板垣明美 2003 『癒しと呪いの人類学』 春風社。
 河西瑛里子 2015 『グラストンベリーの女神たち——イギリスのオルタナティブ・スピリチュアリティの民族誌』 法蔵館。
 河西瑛里子 2021 「スピリチュアル・ツーリズムと地域開発——イギリス、グラストンベリーの行政の対応の変化」 『FAB』 2: 61-74。
 白川千尋 2001 『カスタム・メレシム——オセアニア民間医療の人類学的研究』 風響社。
 鈴木七美 2002 『癒しの歴史人類学——ハーブと水のシンボリズムへ』 世界思想社。
 吉田正紀 2000 『民俗医療の人類学——東南アジアの医療システム』 古今書院。
 ロック、マーガレット 1990 『都市文化と東洋医学』 中川米造訳、思文閣。

- Bowman, Marion 1999 Healing in the Spiritual Marketplace: Consumers, Courses and Credentialism. *Social Compass* 46(2): 181-189.
 Bradford, Nikki ed. 2000(1996) *The Hamlyn Encyclopedia of Complementary Health*. London: Hamlyn.
 Chryssides, George D. 2000 Healing and Curing: Spiritual Healing, Old and New. In Marion Bowman ed. *Healing and Religion*. Enfield Lock: Hisarlik Press, pp. 59-68.
 Ernst, Edzard 2005 Complementary medicine in Germany. *The Pharmaceutical Journal*. March 2005: 339.
 Heelas, Paul 1996 *The New Age Movement: The Celebration of the Self and the Sacralization of Modernity*. Oxford and Malden: Blackwell Publishers.
 Rose, Stuart 2000 Healing in the New Age: It's Not What You Do But Why You Do It. In Marion Bowman ed. *Healing and Religion*. Enfield Lock: Hisarlik Press, pp. 69-80.
 Wheeler, Martin 2004a CAM abbreviations. Unpublished.
 Wheeler, Martin 2004b Alternative Glastonbury Complementary Medicine and Alternative Therapies: Practitioners and Practices. Unpublished.
 York, Michael 1995 *The Emerging Network: A Sociology of the New Age and Neo-Pagan Movements*. Lanham: Rowman & Littlefield Publishers.

インターネット資料

- National Health Service website 2022 Complementary and alternative medicine. (2022年3月1日)

<https://www.nhs.uk/conditions/complementary-and-alternative-medicine/> 2022 年 11 月 14 日閲覧。

National Institute of Medical Herbalists website N.D. ACCREDITED COURSES.

<https://nimh.org.uk/about-nimh/types-of-memberships/accredited-courses/> 2022 年 11 月 13 日閲覧。

National Institute of Medical Herbalists website N.D. ABOUT US.

<https://nimh.org.uk/about-nimh/> 2022 年 11 月 13 日閲覧。

Somerset Intelligence 2013 Census 2011 Briefing Note: Ethnicity, National Identity and Country of Birth of Somerset residents.

<http://www.somersetintelligence.org.uk/ethnicity-in-somerset-briefing-note.pdf> 2020 年 1 月 1 日閲覧。

(2022 年 12 月 5 日受理)

Healing and Healers in Contemporary UK

Eriko Kawanishi

Keywords

Alternative therapy, Energy, Herbal medicine, Spiritualism, Spiritual supermarket

In this paper, I discuss the practice of healing and the process in which those claim to be healers become involved in alternative therapies, such as psychotherapy, reflexology, and past life regression, comparing to other alternative therapy practitioners, such as herbalists and spiritual mediums. This paper is based on the anthropological fieldwork conducted in Glastonbury, Somerset, the United Kingdom. First, I describe the situation of alternative therapies in the British society and show that there is a well-developed and well-accepted learning system for becoming an alternative therapy practitioner. Then, I show how Glastonbury, known as a sacred place of spirituality, offers abundant opportunities to become involved in alternative therapies. I also consider how healing can be viewed, examining two case studies of healing, at an Anglican church and the Goddess temple. Paying attention to the term “energy” and “channel”, I then present the cases of four alternative therapy practitioners, such as healers, an herbal doctor, and a spiritual medium. I reveal that the healers pick up and combine multiple alternative therapies from “spiritual supermarket” to create their own healing system. I also reveal that they connect the specialty of Glastonbury and the reason of their moving to Glastonbury.